



グランシップマガジン
[ジー] vol.22

GRANSHIP magazine
SPRING 2004

SPECIAL

祝! グランシップ5年

Part 1: Stage 舞台芸術

「舞台」に注目。一期一会の感動の世界へ。

Part 2: Concert 音楽

もっと身近に、「音楽」のシアワセを。

Part 3: Art, Literature & etc. アート・文芸ほか

才能が集まる、発信される、グランシップへ。

次代を創る顔

フォトグラファー 小野 静

しずおかアーティスト・リレー

特殊メイク・特殊造形作家 ピエール須田

SERIES わが羅針 第22回

千住真理子

村松友視の文化漫遊

舞台という限られた空間に広がる創造の宇宙。それが無限であることは、グランシップがこれまでにおとどけてきた作品の数々によって、実によくわかるのではないかと思う。

下のリストは、過去5年間に開催したグランシップの自主企画事業のうち、舞台芸術関連の事業を集めたものだが、そのラインナップはまさに多彩だ。ストリートプレイもあれば、ミュージカルやバレエもある。毎年のようにやってくる世界一流のオペラやオペレッタを心待ちに、という声も年々高くなり、一方、開館3周年を記念して立ち上げた県民オペラ『蝶々夫人』は、大きな反響を呼んだ。現在は、第2回開催を目指し、準備がすすんでおり、こうした展開もグランシップならではのといえるだろう。

伝統芸能の分野では、すでに『正月寄席』と『静岡能』は、新春の吉例。とくに能については、観世流能楽師の協力により、毎秋、能演とセミナーを組み合わせた『能楽鑑賞教室』を開催するなど、すそ野の広がりにも一役。江戸糸あやつり人形芝居の結城座、野村万之丞氏による『萬狂言』も、静岡初お目見えとなった。同じく野村氏の『真伎楽』では、大ホールの魅力を活かしたステージで、そのインパクトの強さに圧倒された方も多いのではないだろうか。

その日のグランシップでしか味わえない感動。

舞台の上に、想像を超える創造の宇宙があった。

さらにテーマ性のある複合型イベントもグランシップの特徴の一つで、なかでも一昨年から続く『源氏物語』をテーマにした多彩なプログラムは、グランシップにとっても新たな扉を開いた感があり、源氏物語Ⅱグランシップという認識もまた強まった。東儀秀樹、古澤巖ら、現代の6人の男性クリエイターによる、グランシップ限り、二日限りの舞台『光源氏、さかさまに行かぬ年月』を見逃した人々から、再演を望む声も多く届いた。



1999年3月の開館以来、すでに400万を超える来場者を得ているグランシップ。

その帆にさまざまな風を受けながら、感動の海へと舵をとり、この春、おかげさまで満5年。

そこでこれまでの航路を振り返るとともに、メモリアル・イヤーならではのプログラムを一挙紹介。

まずは、今年、堂々2本のオリジナル企画を立ち上げる、舞台芸術の周辺からのぞいてみよう。

一期一会の感動の世界へ。

GRANSHIP EVENT HISTORY
「舞台芸術」編
1999.3→2004.3

199

- 5 ● プリンセスTENKO
スーパーイリュージョン
- 6 ● グランシップ静岡能
- 7 ● ギリシャ国立劇場「メディア」
- 11 ● ミュジカル「結婚物語ーdoーdoー」

100

- 1 ● グランシップ正月寄席
- 6 ● バロックオペラ「ドン・ジョヴァンニ」
- 7 ● 天功伝説
- 8 ● 能楽鑑賞教室
- 9 ● オペレッタ「天国と地獄」
- グランシップ静岡能
- 10 ● マリア・セラノの「カルメン」
- 11 ● ヴァンパイアズ

101

- 1 ● グランシップ正月寄席
- 3 ● オペラの国のアリア
- 4 ● 江戸糸あやつり人形 結城座古典劇場
- 6 ● みるコンサート 竹取物語
- 7 ● ビーター・ブルック脚色・演出「ハムレットの悲劇」
- 新世紀 スーパー雑技「ムービング」
- 8 ● 納涼寄席「林家木久蔵」
- 9 ● オペラ「セウイリヤの理髪師」全2幕
- 能楽鑑賞教室
- 11 ● 平野啓子「語り」の世界ー羅生門ー

102

- 1 ● グランシップ正月寄席
- グランシップ静岡能
- 3 ● 第1回 県民オペラ「蝶々夫人」



さて、気になるのは、今年、どんな舞台作品が見られるかだが、その答えはズバリ! 源氏と利休にある。すなわちそれぞれをテーマに、グランシップ発のオリジナル2作品が立ち上がるというわけだ。内容については以降で触れるが、ここで特筆したいことは、両作品ともグランシップが発信すべき、グランシップでなければできない舞台であるということだ。

源氏物語のほうは、これまでの多面的な展開から、なるほどとうなずかれる方も多だろう。当然そこにはいい意味で予想を裏切るギミックはあるのだけれど…。

一方、利休は、この秋にグランシップをメイン会場として開催される、静岡県をあげての大イベント『世界お茶まつり2004』

古典? それともコンテンポラリー?
独創舞台のキーワードは二つ、『源氏』と『利休』。

にあわせての上演となる。源氏が結城座による糸あやつり人形芝居なら、こちらは、能楽。新作能である。これは開館以来、能の普及に力を注ぐグランシップにとって、集大成的な作品になるに違いない。

室町時代、世阿弥によって完成され、以来演じ続けられた能と、ほぼ同時期に発生し、利休の大成を経て、今に受け継がれる茶の湯と。いずれも洗練を重ねてこそ、わが道となるものであり、それはまさにグランシップのこれまでと今後に通じるテーマではないだろうか。

グランシップ発の「舞台」に注目。

4 ● 野村万之丞の真伎楽
「マラーホフの贈り物」

7 ● バレエ

● 仮面ライダー

8 ● グローブ座カンパニー

「ヴェニスの人」

9 ● ウィーンの森

バーデン市立劇場

オペレッタ

「マリツア伯爵夫人」

● 浜畑賢吉

ミュージカルトーク&コンサート

● 能楽鑑賞教室

1 ● グランシップ正月寄席

● グランシップ静岡能

3 ● 忍風戦隊ハリケンジャー

ファイナルライブ

4 ● 萬狂言

「野村万之丞が贈る狂言
エンターテインメント」

5 ● 演劇「黄昏」

6 ● テアトロ・キズメット

「美女と野獣」

● オペレッタ「こころもり」

プレセミナー

7 ● 仮面ライダー

スーパーライブ2003

9 ● 浜畑賢吉

ミュージカルトーク

● ウィーンの森

バーデン市立劇場

オペレッタ「こころもり」

10 ● 能楽鑑賞教室

1 ● バロック音楽と

舞踏のスペクタクル

ヴェルサイユの祝祭

● グランシップ正月寄席

● グランシップ静岡能

*以上は、自主企画事業のうち「舞台芸術」関連の事業のみ
の実績。「音楽」関連の事業についてはP12を、「アート」文芸
ほか」の事業についてはP22を参照のこと。なお、その内容
から重複記載の事業もある。

美しくも異彩！グランシップが5周年におくる、もう一つの源氏物語。

Part 1 Stage
舞台芸術

グランシップオリジナル制作 糸あやつり人形芝居

夢の浮橋

人形たちとの「源氏物語」

【スタッフ】
作・演出・美術……………佐藤 信
人形美術・意匠……………山口小夜子
音楽……………磯田 収
音楽コーディネーター……………磯野義幸
音響……………島 猛
衣裳……………宮本尚子
舞台監督……………森下紀彦
演出助手……………鈴木章友
【出演】
結城孫三郎……………荒川せつ子
結城 一条……………結城育子
結城千恵……………畑崎潤一
◆ 竹本素京（義太夫）……………塩川京子
◆ 植松 聡……………清水あづさ
毬谷 友子……………三宅千香

山口小夜子氏デザインによる人形。結城座では、素材に紙を用いた人形を操るのは、今回が初めて。普通は目立たない色とする糸も、今回はデザイナーのこだわりで白と赤に。

人形が語り、役者が歌い綴るとき、
”佐藤源氏”の世界が立ち上る…。

作者紫式部は、『源氏物語』全54帖を書き上げるのに、実に十数年の歳月を費やしたという。長大にして最古の小説。にもかかわらず、千年を経た今なお求心力を失わないという事実は、もはや驚異ではない。

グランシップでは、これまでも源氏物語の世界をテーマに、さまざまなプログラムを展開してきたが、とりわけ今回の舞台は、グランシップとしてエポック・メイキング的なものとなる可能性大だ。顔ぶれも、物語の取り出し方も、すべてが斬新で独創的。かつてない、けれど、グランシップでなければ実現しなかった作品ともいえる。

作・演出そして美術に佐藤信氏。出演は、約370年の歴史を持つ江戸糸あやつり人形芝居、結城座と

物語を知らない人も、これを見たら、
絶対源氏を読みたくなる！

さて、肝心の人形だが、これをトップモデルとしてはもちろん、多彩なクリエイションで知られる山口、

開けば、それだけで俄然興味は高まる。三十年來のつきあいという結城座について、佐藤氏はこう語る。「結城座には、海外の人形芝居や文楽とは違う、独特の魅力、知恵がある。操る人が台詞を語るというのもその一つで、ほかにもたとえば結城座の人形は、息をする。呼吸という人間の形をとらえた操りの知恵、そこに結城座の深さを見るわけです。その一方で、人形だからその動きもあり、人間では到底できないへ光のように舞台を横切ることも、へ木のように倒れることも、人形ならできてしまう。そうした人形が持つイメージの飛躍を使いながら、源氏物語が全編をもつて言いたいことは何か、そのエッセンスを取り出していければと思っています」

小夜子氏がデザイン。女性3体は、登場人物の誰ということではなく、年齢層によって使い分け、男性へ

『源氏物語』は、およそ千年前、紫式部によって書かれた世界最古の小説で、全五十四帖からなる平安時代の物語。光源氏を主人公とし、登場人物は約430名。主な人物だけでも50名は下らない。

「源氏物語には今に通じるものがあり、この顔ぶれなら絶対面白くなるなと思いました」



山口小夜子

1970年代以降、トップモデルとして活躍。'77年米ニューズウィーク誌「世界の6人のトップモデル」の一人に選ばれ、「SAYOKO マネキン」が世界のショーウィンドウを飾る。'83年ファッション・エディターズ・クラブ賞、'84年毎日ファッション大賞特別賞受賞。さらに演劇、映画、ダンスコンテンツボラリー等舞台活動で国内外のクリエイションに参加。雑誌・広告・舞台等の出演作品で衣裳デザインを行うほか、ジャンルを超えた活動を続けている。

「美しく悲しく、さらに愛おしさの抱けるような作品になればと思いますね」



佐藤 信

劇作家・演出家。'60年代後半より日本の小劇場運動のリーダーとして「黒テント」とともに、移動公演を中心に活動。アジアの現代演劇交流に加え、近年はヨーロッパで活躍。現代演劇の他、現代舞踊、オペラ、能、日本舞踊など、多様な劇場作品を演出。結城座とも数多くの作品を手がける。岸田國士戯曲賞のほか紀伊国屋演劇賞、中島健蔵音楽賞を受賞。'02年3月まで世田谷パブリックシアターのディレクターを務める。東京学芸大学教授。劇団黒テント演出部所属。

結城座

'01年春『伽羅先代萩』でグランシップに初お目見えの結城座は、約370年の歴史を持つ日本唯一の糸あやつり人形芝居。江戸幕府公認の五座のうち、今日、座として存続するのは結城座のみ。'56年東京都無形文化財に指定。古典から新作、写し絵と積極的な公演活動を展開。世界各地で成功を収めている。佐藤氏いわく、「モノである人形が生きているように動き出す瞬間がある。それはお客さんの想像力と人形が一致したときで、見ている人は自分の想像力で舞台に参加できる。そうした見る楽しみが、普通のお芝居とは違います」



現在、ただ一人という義太夫弾き語り、竹本素京氏。結城座に嫁ぐ前は、娘義太夫のスターだった。



昨年11月3日、本公演のチケット発売を記念してトークショーが開催された。左から山本肇（グランシップ館長）、佐藤信、山口小夜子、結城孫三郎、結城一糸の各氏。



グランシップ開館5周年記念
グランシップオリジナル制作 糸あやつり人形芝居

チケット
発売中

夢の浮橋 ～人形たちとの「源氏物語」～

3/27(土) PM5:30開場 PM6:00開演
3/28(日) PM1:30開場 PM2:00開演
PM5:30開場 PM6:00開演
グランシップ 中ホール・大地
全席指定 前売4,000円 当日4,500円(税込)

わたしのグランシップ5年。

(財)静岡県文化財団 利用サービス課
グランシップマガジン「G.」編集担当 望月 由美

グランシップの自主事業の中には、わかりづらいもの、取つき難いものがあるため、読むことで理解を深めたり、関心を高めていただければと、開館以来、年4回、この「G.」を発行してきました。5周年を機に表紙も変わりましたが、まだまだ試行錯誤の段階です。読者のみなさんにいろんな声をお寄せいただき、誌面づくりの参考にしていきたいです。



「原作の源氏ではなく、佐藤信の源氏というものに興味があるんです」

十二代目 結城孫三郎

十代目結城孫三郎(故・結城雪斎)の長男として生まれ、4歳で初舞台。11歳から武智歌舞伎座に入門し、歌舞伎を学ぶとともに、観世栄夫に能を、茂山千の丞に狂言を学ぶ。古典的な糸あやつり人形芝居にとどまらず、佐藤信ら、さまざまな演出家と新たな芝居づくりを展開。'93年十二代目結城孫三郎を襲名。主な出演作に『リチャード三世』(演出/福田善之)、『ペレアスとメリザンド』(演出/佐藤信)、『伽羅先代萩』など。

人形を操るための糸は、通常17本。動きの必要によって、糸が増えていく。かつては絹糸だったが、相手の糸と絡まったときに潔く切れるよう、現在は本綿糸を使っている。

2体は、光源氏のハレとケ、光と影として演じ分けられるのだという。日本の人形の起源が紙であったことから、紙を用いたというそれは、そのまま二つの世界観、源氏の美学を象徴しているといえよう。

そして、そんな人形たちとの唯一の生身の共演者として、佐藤氏は二人の女優をキャスティングした。

「源氏の最後に登場する浮舟は、自殺を図るのだけれども死なない。これが面白い。そこで全編を一人の人生としてとらえて、歌のようなものでつなぎながら、浮舟から物語を振り返ってみたい」と。

この浮舟役、つまり源氏物語の世界と観客席を繋ぐ役どころは、歌がうまくて、多彩な年齢層をこなせる役者でなければ。これはもう穂谷(友子)さんしかない

「生きているということは、絶対思い通りにならないものなのだということを、恋と死、そして、生霊の3つから描いてみたい。美しく、悲しく、愛おしい作品になれば、みなさんに喜んでいただけるんじゃないでしょうか。源氏物語を読んだことのない人が、これを見た後に読みたくなる、そんな作品にしたいと思っています」

なお、本作品は、3月のグランシップでの公演を皮切りに、グランシップ制作作品第1弾として、以降、全国各地で上演の予定である。

「源氏物語」は、光と影として演じ分けられるのだという。日本の人形の起源が紙であったことから、紙を用いたというそれは、そのまま二つの世界観、源氏の美学を象徴しているといえよう。

そして、そんな人形たちとの唯一の生身の共演者として、佐藤氏は二人の女優をキャスティングした。

「源氏の最後に登場する浮舟は、自殺を図るのだけれども死なない。これが面白い。そこで全編を一人の人生としてとらえて、歌のようなものでつなぎながら、浮舟から物語を振り返ってみたい」と。

この浮舟役、つまり源氏物語の世界と観客席を繋ぐ役どころは、歌がうまくて、多彩な年齢層をこなせる役者でなければ。これはもう穂谷(友子)さんしかない



毬谷友子

『夢の浮橋』に浮舟役で出演。人形たちとともに佐藤源氏の世界を創りあげる。

単なる色恋の話だけでなく、源氏物語の中にある
ギリシャ悲劇のような壮大さ、美しさを
舞台の上でつかまえられたら、と思います。

小さい頃から本が好き。しかし、残念ながら、『源氏物語』との出会いはいいものではなかった。

「学校時代、古文の時間に文法に振り回され過ぎたの。やはり出会いというのは大事ですね。（佐藤）信さんとは、子どものお芝居を4年間やっていますけれど、よく言うんです。子どもの劇場との出会いをインチキなものにしたくないと」大人になり、仕事の必要から、『源氏物語』

を幾度となく読んでみる。すると、そこには子どもの頃にはわからなかった艶っぽさ、文学的な奥行きがあった。

「その瞬間をよくつかんてる。早朝の静けさの中、お宮に入っていく描写とか、それはどんな照明でもつくることのできない世界なんですね。そういうことでは、人形というのは正解かもしれません。時空が飛べますからね。しかも生身の人間にはない透明感があつて、ビュアに伝わる

ということはあると思います」

演出の佐藤氏との出会いは二十年前。

「そのとき信さんに教えられたことは、どんなに可愛いお姫さまでもそこに欠点を見つけれれば、役に幅が出て、説得力も出るということ。だから、この源氏物語もただきれいな人が右往左往してるだけの物語ではなく、と思いますよ」お互いに稽古場で悶いていくタイプ。それはカードの出し合いのようだという。

「テーブルの上で考えていることと、実際のできあがりは大分違ったりして。でも、これが芝居の楽しさでしょう。すべて商業ベースの時代ですから、実験的なものや本当の意味での文化的なものができなくなっている。そうした中で、こうして本当に価値のあるものを地方から発信してくださると、私たちも勉強になります。演劇とは本来こうあるべきじゃないかなと思うんですけれどね」



まりやともこ ● '85年宝塚歌劇団退団後、一躍脚光を浴びる。'88年文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、'92年父である劇作家、故・矢代静一作のひとり芝居「弥々」で、第27回紀伊国屋演劇賞個人賞、'03年文化庁芸術祭優秀賞を主演と演出で受賞。国内外アーティストに絶大な信頼を得ており、ヨーヨー・マには「Your Voice is Music」と絶賛される。代表作に「農作 桜の森の満開の下」（作・演出／野田秀樹）、「マクベス」（演出／ロベール・ルパージュ）、「ふたごの星」（演出／佐藤信）ほか。

「世界お茶まつり」にあわせて放つ、グランシップ渾身の新作能とは？

グランシップ新作能

利休

これぞ「服の幽玄」。

観世流二十六世宗家が魅せる、『利休』。

能には、食わず嫌いならぬ、知らず嫌いが多くはないだろうか。そこでグランシップでは、能の面白さ、奥深い楽しさをもっと知ってほしい、とくに若い人に経験してほしいという願いから、開館当初より能楽公演とは別に『能楽鑑賞教室』を開いてきた。能の上演はもとより、面や装束の付け方を公開したり、さらに事前に希望の学生に観世流能楽師の方々が直々に仕舞の稽古をつけ、当日発表するなどして、すそ野を広げるお手伝いをしてきたつもりだ。そして、その成果の一つというべきか、これをきっかけに、常葉短大では能のクラブも発足したと聞いている。

それらはもちろん能楽会最大流派である観世流の協力の賜であることはいうまでもない。観世流とは、開館の年、静岡県能楽鑑賞会から寄贈された能舞台のこけら落としを観世清和宗家が勤めて以来続く縁。5周年のこの節目に立ち上げる新作能『利休』に、演出家として、また、シテ方（主役）として参加いただけることは、実に喜ばしいことだ。

しかも能の台本にあたる詞章は、グランシップでは『連詩の会』で縁深い大岡信氏夫人であり、劇作家として、また、新作能の作家として知られる深瀬サキ氏に決定。さらに芸術監督には、能楽と他の芸術、学芸との交流と橋渡しを手がける土屋恵一郎氏と、錚々たる顔ぶれが揃った。

題材となる人物、千利休は、ご存知、茶道の宗匠であり、侘びの美意識を貫いた天下一の茶匠である。あらゆる贅沢の中から極限まで無駄を省き、緊張を創り出す。図らずもこれは大道具や背景を

用いず、余分な物をギリギリまで省略した一つの型を求める芸術、能に通じる。

折しも「世界お茶まつり2004」が開かれる今秋。本公演は、この記念事業の一つでもある。侘びと幽玄という、日本が誇る創意を極めた二つの文化を融合し、茶どころ静岡、グランシップから堂々発信。乞うご期待だ。

Part 1 Stage
舞台芸術

グランシップ新作能

利休

11/3(祝・水)

グランシップ 中ホール・大地

わたしのグランシップ5年。

技術スタッフ(株)ステージ・ループ 稲木 貴広

あるときは大相撲の屋根を高さ60mから吊ったり、アートを造り上げたり。新しい構想に出会いながら、経験を積んできたという感じです。技術スタッフはマジシャンのようなもの。空間をこんな風に、というアイデアをカタチにするのが仕事です。まだまだ可能性を秘めたグランシップ。今後どんなカタチが出現するか、私自身楽しみにしています。

グランシップが満5歳を迎えた。単なる通過点といってしまうはそれまでだが、バブル崩壊後のきびしい不況と閉塞状況の中で誕生した、その最初から手探りで育ててきた一人として、心のなかで静かに祝杯を上げたい気持ちだ。この5年間さしたる事故もなく運営できたことが、第二につれしい。そして金食い虫として悪評サクサクだったスタート時点に比べ、楽しみと賑わいの空間として、それなりの存在を認め好意的な眼差しを送ってくれる方々が増えてきたことも、力を与えてくれる。静岡県民の心はやはりあたたかく、ありがたいものである。

来館者数も去年末までに416万人余に達し、満5歳を迎える今年3月までは430万人を超えそうだ。

5年間をふりかえって、館長として誇りを持つことがいくつか出来た。

一つは、企画事業、貸館事業を問わず来館者へのサービス・もてなしの姿勢が、館の運営にかかわるすべての担当者に浸透してきたこと。使いやすい、借りやすい、楽しい、快い、安いという声が増え、職員などの対応への不満・不平の声が開館当初よりいぶん少なくなってきた。

二つ目は、館の運営を支えているボランティア・スタッフ、グランシップ・サポーターの存在と成長である。現在登録者

は177人。1・2期生で5年の任期を全うし、さらに5年延長してつづけたというサポーターも33人を数え、いまやグランシップになくってはならない存在になっている。

三つ目は、文化の創造・育成の場としての存在感。これまでトライしてきた事業…『しずおか連詩の会』、『県民オペラ』、『Sing』若手クリエーターの企画公募展、『MME』マーチングバンド、ダンス歌などによる県民参加ヨロレション、『静岡の魅力 写真コンテスト』、静岡交響楽団のシリーズ公演、糸あやつり人形芝居『夢の浮橋』の制作、新作能『利休』の制作、ふじのく

に文化交流事業による県民活動への助成など、いわば助走段階をほぼ終えただけで、まだ胸を張れるところまではいっていないけれど、いまの助走の延長線上にこれからのグランシップの姿があるという確信らしいものは掴めたような気がする。もつとその存在感を明確にアピールできるように、離陸“していききたい”というのが私たちの密かな願いだ。

ともあれ、最初の5年は過ぎた。次の5年を目指して新しいスタートを切る。がんばりたい。

文化の創造にむけて、前へ！

グランシップ館長 山本 肇



グランシップのこの5年間を「音楽」というフィールドから振り返ったとき、そこには大きく分けて2つの道が見える。一つはクラシックで、もう一つがジャズだ。

まず、クラシックのほうから見てみると、オーブン・イヤーから2年間続いた『クラシックサロン』は、ときには宮廷菓子つきのティータイムが設けられたことから、母娘で参加する姿も多く見られた人気のシリーズ。02年春からは、オーケストラならではの厚みのある音世界を手頃な価格でとどけようと、静岡交響楽団によるコンサートシリーズがスタート。今年、早くも3年目を迎える。

このほか、中村紘子やヨーヨー・マをはじめとする、世界トップクラスの音楽家やオーケストラがグランシップに続々登場。定期的に開かれる世界的オペラ劇場の公演などは、すでにおなじみとなりつつある。また、『モーツァルト！モーツァルト！モーツァルト』など、テーマ性のある複合型イベントも、グランシップの得意なところだ。

一方、ジャズのほうでは、何といつても開館以来続くロング・シリーズ『ジャズ・ライヴ』

**クラシックでは、世界的音楽家が続々登場！
そして、キャスティングが光る「ジャズ・ライヴ」。**

がその筆頭だろう。女性アーティストをフューチャーした1年目から数えることすでに20回。ワン・ドリンク付という“おまけ”も、魅力の一つ。日野皓正、渡辺香津美、大西順子といった大御所から、今をときめく寺井尚子、TOKUまで、独自のキャスティングが話題を呼んでいる。

さらに大ホールをダンスホールに変えたグレンミラーオーケストラをはじめ、東京スカパラダイスオーケストラや吉田兄弟など、幅広い音楽が、常にここグランシップを湧かせてきたのだ。

「音楽」のシアワセを。



グランシップがあることによって、音楽が身近になった。そう言われたらシアワセだ。

「東京までは行けないけれど」「難しいことはわからないけれど」「通じないけれど」…

そんな、さまざまな「けれど」に応えるためにおとどけてきた、この5年。

もっと身近に、もっと深く、もっと心豊かに。今後は、そうした「もっと」に応えていきたい。

GRANDSHIP EVENT HISTORY 「音楽」編 1999.3→2004.3

1999

4 ●中村紘子
ピアノリサイタル

6 ●クラシック サロンI
「シヨバンとフーランク」

7 ●ジャズ・ライヴI「木住野佳子」

8 ●Moving
Music Express

9 ●ジャズ・ライヴII
「寺井尚子」

10 ●英国女王陛下の
近衛軍楽隊

11 ●ジャズ・ライヴIII
「ケイ・コリー」

12 ●クラシック サロンII
「音楽とワイン」

●音楽物語「スノーマン」コンサート

2000

1 ●ふじのくに
新春コンサート

●ジャズ・ライヴIV
「大西順子」

2 ●クラシック サロンIII
「バレンタインコンサート」

3 ●BS日本のうた

●モーツァルト・モーツァルト・モーツァルト！

6 ●ジャズ・ライヴV「国府弘子」

7 ●クラシック サロンIV「巴里祭によって」

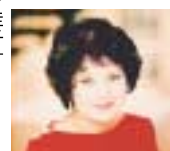
8 ●ヨーヨー・マ ミレリアムコンサート

●日本フィル夏休みコンサート

9 ●ジャズ・ライヴVI
「城戸夕果」

12 ●ジャズ・ライヴVII
「タイムファイブ」

●静岡県
100年音楽祭



満を持して、という言葉があるが、音楽ファン、とくにクラシックファンにとって、今年のグランシップはまさにそれ。この5周年を待っていたかのよう、今、話題性のもつとも高いとわれるオーケストラや音楽家が次々とこのグランシップにやってくるのだ。

もちろんこれまでもオーケストラでいえば、日本フィルやN響、ベルリンフィルのクインテットも素晴らしい演奏を聴かせてくれた。しかし、今年なんとロシア最高の称号“チャイコフスキー記念”を冠したモスクワ放送交響楽団が来るのだ。それだけではない。世界最高峰のオーケストラといわれるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団もやってくる。しかもそれぞれフェドセーエフとゲルギエフという名指揮者を従えて、である。

モスクワ！ウィーン！音楽ファン垂涎のオケが ついにグランシップにやってくる！

また、3百年前の幻の名器ストラディヴァリウスの“デュランティ”で話題の千住真理子、チャイコフスキー・コンクールで日本人初、女性初の優勝を果たした上原彩子の名も、このビッグイヤーを飾る。もちろん気軽に親しめるプログラム、参加できるプログラムもこれまでに以上に充実。

今まで「また次の機会に…」と腰の重かった方も、ぜひ5周年のこのチャンスに。「行つてよかった！」きつとそう言っていただけのひとときになるのではないかと思う。

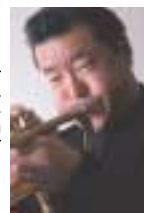
もっと身近に、

101

- 1 ● ニーヤヤーコンサート
- 2 ● クラシック サロンⅦ
「愛を捧げる」
- ジャズ・ライヴⅧ
「熱帯JAZZ楽団」
- 4 ● 東京スカパラダイス
オーケストラ
- 5 ● 家族 de ピクニックコンサート
「日野皓正」



- 6 ● 岩城宏之 &
オーケストラ・アンサンブル金沢



- 7 ● 「サーカス」コンサート
- 9 ● Moving Music Experiences 2004
● ジャズ・ライヴⅩ「ジョー・ビン・マイ・ラブ」
- 12 ● グレン・ミラー オーケストラ
Dance & Music

- モーツァルトと
サリエリを楽しむタベ
- N響コンサート
- ジャズ・ライヴⅪ「TOKU」
- スウィングル・シンガーズ
- 新世紀コンサート

102

- 1 ● ニーヤヤーコンサート
- 3 ● ルウカス・ダアヴィット
ヴァイオリンコンサート
- ジャズ・ライヴⅫ「塩谷哲
アコースティックトリオ」



- 4 ● 静響コンサートシリーズ vol. I
- 5 ● ジャズ・ライヴⅩⅢ「akiko」
- 6 ● ヨーヨー・マ & マーク・モリス
ダンスグループ in 静岡
- BS こども のど自慢
- 7 ● 静響コンサートシリーズ vol. II
- 8 ● ベルリンフィルハーモニー・プラスクインテット
- 9 ● 静響コンサートシリーズ vol. III
- ジャズ・ライヴⅩⅣ
- 「ボブ・ジェームス & ラリー・カールトン」

♪ グランシップ春のコンサートシリーズ ♪

世界を沸かすフェドセーエフ、ついに登場！ モスクワ放送交響楽団&上原彩子

チケット
発売中

■5/26(水)
■PM6:00開場 PM7:00開演
■大ホール・海
■全席指定〈税込〉 SS席 9,000円 S席 6,000円
A席 4,000円 B席 1,500円
ステージ後部席 2,500円
学生券(SS席をのぞく) 1,500円

インパクトのある音世界を引き出し、世界中で圧倒的な人気を誇るフェドセーエフ。彼とモスクワ放送交響楽団のコンビネーションは、今、円熟期にあるといわれる。ロシア文化省やチャイコフスキー博物館などからロシア最高の称号「チャイコフスキー記念」を冠することを許されたオーケストラと、チャイコフスキー・コンクールのピアノ部門で日本人初の優勝に輝く上原彩子によるチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番は、必聴中の必聴だ。

【曲 目】チャイコフスキー／「四季」op.37bisより「4月」「6月」「10月」「12月」(編曲ガウク)、
ピアノ協奏曲第1番変ロ短調op.23

ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲
ラヴェル／ボレロ

【指揮】ウラディーミル・フェドセーエフ
【ピアノ】上原彩子
【管弦楽】モスクワ放送交響楽団

上原彩子

’98年第11回チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門で最年少セミファイナリストに。4年後の第12回同コンクールで女性初、日本人初の第1位を獲得。その他、国内外で受賞歴多数。’80年香川県生まれ。



名曲「新世界より」を浜フィルで聴こう！ 浜松フィルハーモニー管弦楽団

チケット
発売中

■5/8(土)
■PM2:30開場 PM3:00開演
■中ホール・大地
■全席指定〈税込〉 S席 3,000円 A席 2,000円
B席 1,000円 学生券 1,000円

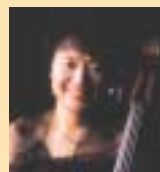
ドヴォルザークがアメリカ滞在中に作曲したことから「新世界より」の副題が添えられた『交響曲第九番』。第2楽章は、「家路」として誰でも一度や二度は歌ったことがあるのではないだろうか。彼の没後100年にあたるこの節目にぜひ聴きたい一曲だ。演奏では、県内のプロオーケストラ、浜フィルがついにグランシップ初登場。

【曲 目】ドヴォルザーク／スラヴ舞曲第1番ハ長調op.46、
チェロ協奏曲ロ短調op.104、
交響曲第9番ホ短調「新世界より」op.95

【指揮】円光寺雅彦
【ソリスト】山崎伸子(チェロ)
【管弦楽】浜松フィルハーモニー管弦楽団



円光寺雅彦



山崎伸子



浜松フィルハーモニー管弦楽団

’98年結成の、市民による、市民のための、市民のオーケストラ。’03年には(財)静岡県文化財団より地域文化活動奨励賞を、日本放送協会静岡放送局よりNHK静岡あけぼの賞を受賞している。

これは千載一遇のチャンスかも！思いきって「音楽」の贅沢を。

Part 2 Concert
音楽

グランシップ5周年の今年は、ドヴォルザーク没後100年にあたる年でもあるという。そこで、そんなドヴォルザークの名曲からグランシップの春はスタートする。

『グランシップ春のコンサートシリーズ』では、約1ヶ月間に3つのコンサートを用意。浜フィルによるドヴォルザーク、千住真理子の名器デュランティによる室内楽、そして、ウラディーミル・フェドセーエフ率いるモスクワ放送交響楽団と上原彩子の共演：と、いずれも今が旬、ジャスト・タイミングなキャスト&プログラムだ。

対して秋には、祝祭ムードをさらに盛り上げるかのようにウィーンフィルが待っている。チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」ほか魅力のラインナップ。そして、世界のクラシックシーンを湧かせるワレリー・ゲルギエフのタクトは、まさに、「待望」。ぜひ、今から楽しみにしていただきたいと思う。

また、聴くのもいいけれど、参加もしたい。そんな方は、年末の第九がぴったり。それも記念すべき2004年にふさわしく、2004人で大合唱をしよう！という壮大な計画が着々と進行中。いずれも完売必至、満席当然のメニューだけに、早々のチェックがおすすめです。

- 10 ● 千年の時を超えて「源氏物語の世界」
光源氏・さかさまに行かぬ年月よく美しき男たちの
「源氏 音かたり」
- 英国女王陛下の
近衛軍楽隊
- 12 ● ジャズライブXV
「佐山雅弘ピアノトリオ
『MS』with 川井郁子・村田陽二」
- 静響コンサートシリーズ vol.V
新世紀第九コンサート



103

- 1 ● ニーイヤーコンサート
- 2 ● 静響コンサート
シリーズ vol.VI
● ジャズライブXVI
「渡辺香津美&鈴木大介
ギターデュオライブ」



- 4 ● 静響コンサートウィーンシリーズ vol.I
● ジャズライブ「中村健吾クインテット」
- 6 ● 吉田兄弟全国ツアー2003
- 7 ● ウィーン室内管弦楽団&仲道姉妹
- 静響コンサートウィーンシリーズ vol.II
- 10 ● ジャズライブ
「谷川賢作スペシャルユニット」
- 11 ● 静響コンサートウィーンシリーズ vol.III
● 源氏物語「和に親しむ」
雅楽公演会
「いま甦る千年の時」

12

- グレン・ミラー
Orchestra & Music
- 新世紀第九コンサート '03
地球讃歌「花」
- ジャズライブ「塩谷哲」

2

- 1 ● ニーイヤー
コンサート
- 2 ● Moving Music
Express FLORA 2004



*以上は、自主企画事業のついでに「音楽」関連の事業のみの実績「舞台芸術」関連の事業についてはP.4を「アート文化」ほかの事業についてはP.22を参照のこと。なお、その内容から重複記載の事業もある。

幻の名器デュランティとともに。

千住真理子と仲間たち

■6/4(金)

■PM6:30開場 PM7:00開演

■中ホール・大地

■全席指定〈税込〉 S席 4,000円 A席 3,000円
学生席 1,500円 ※当日各500円増

およそ300年前、ローマ法王に捧げられ、そのまま演奏家の手に渡ることなく眠り続けたストラディヴァリウスの“デュランティ”。その幻の名器は'02年夏、千住真理子の手の中でついに目覚めたのだ…。そんな名器にふさわしいひとときを、彼女がグランシップのためにプロデュース。(関連記事P17～参照)

【曲 目】 パッハ／無伴奏ヴァイオリン バルティータ第3番より
第3楽章「ガウット」
ヘンデル／ラルゴ「オンブラ・マイ・フ」
エルガー／「愛のあいさつ」op.12
ベートーヴェン／ピアノ三重奏曲第4番変ロ長調「街の歌」
ドヴォルザーク／弦楽四重奏曲第12番ヘ長調「アメリカ」op.96
シューベルト／ピアノ五重奏曲イ長調D667「ます」op.114
【出 演】 千住真理子(ヴァイオリン)、永峰高志(ヴァイオリン)、
藤井一興(ピアノ)、上村昇(チェロ)、
菅沼準二(ヴィオラ)、西田直文(コントラバス)



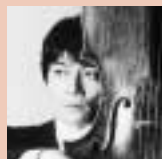
写真提供:東芝EMI
千住真理子



永峰高志



藤井一興



上村 昇



菅沼準二



西田直文

チケット
発売中



モスクワ放送交響楽団

'30年設立のモスクワで最も長い歴史を誇る名門オーケストラ。'92年チャイコフスキーの演奏団体として世界最優秀オーケストラと認められ、ロシア文化省、国際チャイコフスキー協会、チャイコフスキー博物館より「チャイコフスキー記念」の称号が贈られた。



ウラディーミル・フェドセーエフ

'74年にロジェストヴェンスキーの後任としてモスクワ放送交響楽団の音楽監督・首席指揮者に就任。その他、東京フィル首席客演指揮者、さらに'97年フリュベック・デ・ブルゴスの後任として、名門ウィーン交響楽団の首席指揮者に就任。

これぞ、世界最高峰のオーケストラ

5周年祝祭コンサート

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

～ウィーン・フィルハーモニー ウィーク イン ジャパン2004～

■11/20(土)

■PM4:00開場 PM5:00開演

■大ホール・海

ウィーンの楽壇に登場するたびに、熱い演奏で聴衆を魅了してきたゲルギエフ。前々からウィーン・フィルを伴っての来日が噂されていたが、大物同士だけに難しいのでは?という声もあった。それがついに実現!!しかもグランシップで聴けるとは!これ以上の“お祝い”があるだろうか?世界最高峰の演奏をぜひ、お聴き逃しなく。

【曲 目】 J.シュトラウスⅡ／ワルツ「戴冠式の歌」op.184、ニコ・ボルカop.228、
(予 定) ベルシア行進曲op.289などロシアにちなむ曲、その他
チャイコフスキー／交響曲6番短調op.74「悲愴」

【指 揮】 フレリー・ゲルギエフ

【管弦楽】 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

1842年創立。ウィーンにある楽友協会大ホールを本拠地として活動。オペラ上演で名高いウィーン国立歌劇場管弦楽団が、オペラ上演以外の公演の際にこの名を名乗る。隣国ドイツのベルリン・フィルハーモニー管弦楽団(1882年創立)とともに、実力・人気を二分、世界最高峰のオーケストラの一つといわれる。

フレリー・ゲルギエフ

'78年キーロフ歌劇場デビュー。'88年同劇場の芸術監督に就任。'98年ザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して絶賛。この他ニューヨーク・フィル、ロンドン・フィル等に客演。メトロポリタン歌劇場に「オテロ」でデビュー。'97年より同オペラ初の首席客演指揮者に就任。



フレリー・ゲルギエフ ©Theresia Linke

わたしのグランシップ5年。

(財)静岡県文化財団 企画制作課 河口 拓也

思い出深いのはヨーヨー・マのコンサート。公演前日、リハーサルの際の赤いシャツ姿が印象的でした。あれを機に大ホールでのクラシックコンサートも多くなりましたね。また、『トレインフェスタ』など毎年恒例の企画は、5年の間に徐々に進化を遂げ、どんどん内容がよくなっています。今後ますます進化を続けるグランシップにぜひご期待ください!

あなたもぜひ、その中の一人に。

2004人の第九コンサート

■12/5(日)

■大ホール・海

音楽家たちの間では、ベートーヴェンの第九ほど完成された曲はないといわれている。そして、合唱つきの第4楽章ほど、年末にこだまする曲はないかもしれない。グランシップの節目を迎えた2004年、大ホールを埋め尽くす2004人の合唱団。あなたもぜひ、その中の一人に。

【曲 目】 ベートーヴェン／交響曲第9番



アニメーションワークやバルーンアートで、幕を開けたグランシップ。空間そのものを建築作品として見学に訪れる人も未だ後を絶たないが、空間プロデューサーといえば、『Sing』では、毎年、若きクリエイターたちのためのコンペティションを展開。初回は、日比野克彦審査員長の呼びかけに、デジタルアートを手がける藤井フミヤ氏が急きょ発表会に姿を現すなど、うれしいハプニングもあった。

また、報道写真展を多く手がけてきたのも、グランシップの大きな特徴といえるだろう。ロバート・キャパやクリス・ステイル・パーキンスをはじめ、キャパ賞に輝く写真家たちの作品は、戦争体験のある人々にはもちろん、若い層にも予想以上の大きな反響を呼んだ。ニューヨーク同時多発テロの翌年には、『ニューヨークセブテンバー11』を開催するなど、タイムリーなリリースも記憶に残るところである。

Sing、報道写真、連詩…。
グランシップだから、できたこと。できること。

さらに複合施設ならではの特徴を生かし、複数の空間をジャックしたフェスティバルも魅力の一つ。たとえば'00年、石井竜也による『DRAGAZIA』では、大ホールで二大迷宮マーケットが立ち上げられ、会議ホールではトークショーやムービー・コレクションの展示が行われた。コンサートには東京・大阪からも駆けつけたファンも多く、そうした人々のパワーにグランシップ自身も大いに刺激を受けた。

一方、文芸のフィールドでは、毎秋、『連詩の会』を開催し、独自の文化を発信。また、別ページにも紹介したが、2年にわたり『源氏物語』を多面的にひもとき、視覚的、聴覚的、嗅覚的に学び楽しむ機会づくりへの働きかけも、グランシップの特徴的な試みではないだろうか。



グランシップへ。

たとえば、ギャラリーの企画一つをとっても、ほかの美術館やデパートなどのそれとは違う。というよりもむしろ“そうでなければ”と思う。ほかでは見ることも、実現することができないもの。それがバルーンアートであったり、空間プロデューサーのコンペティションであったり。さまざまな発想が集まり、また、発信されていく。そんなグランシップとして、これからも。

GRANSHIP EVENT HISTORY
「アート・文芸 ほか」編
1999.3 → 2004.3
199

- 3 ● アニメーションワークス
● トレーンフェスタ
- 4 ● バルーンアート・フェスティバル
- 7 ● 第30回日展・静岡展
● 文化の広場Ⅰ
● NHK文化講演会「池宮彰一郎」
- 9 ● 文化の広場Ⅱ
- 10 ● “グランボヤッジ”フェスティバル
● NHK文化講演会「ジエムス三木」
- 11 ● しずおか連詩の会
● グランシップ
● ミレニアムジャーニー
- 12 ● Sing '99
- 1 ● お正月広場
- 2 ● 高松宮妃のおひなさま展
- 3 ● ガーデニングフェスティバル
- 4 ● 両洋の眼2000展
● みんぱく移動博物館
- 5 ● “グランボヤッジ”フェスティバル
- 6 ● トレーンフェスタ2000
- 7 ● 大竹省写真展
- 8 ● 親と子のサイエンススクール
- 10 ● オーションカフェ①
- 11 ● 2000年しずおか連詩の会
- 12 ● Sing 2000
- ロバート・キャパ賞写真展
- オーションカフェ②



© Magnum courtesy of Ruth Orkin



誰もが见たい、参加したい。でも、どこにもあるものじゃつまらない……。だから、グランシップは5周年を迎えた今後も変わることなく、静岡県の人々のための企画、静岡県の人々の好奇心をピッと刺激するイベントをどしどし立ち上げていくつもりだ。

この春、いよいよグランシップ上陸(?)のゴジラもしかり。静岡県と縁のある、そんな結び目をクローズアップ。また、今やグランシップの顔ともいえるべきプロジェクト『Sing』や『連詩の会』では、5年間の総まとめとともに、ビッグなスペシャル企画がそれぞれに決定。もちろん『サイエンススクール』や『文化のクロスロード』『講談教室』など、学びと体験を融合させた参加型イベントも健在だ。

さらに今年は、ブーム再

**単なる「楽しかった」じゃ終わらない、
そんな「刺激」や「体験」がいっぱい!**

来の感のある『サンダーバード・モダン展』(P 26 参照)など、恒例の『トレインフェスタ2004』(P 33 参照)とともに、親子で楽しめるプログラムがますます充実。単なる「楽しかった」だけでは終わらない「刺激」や「体験」を持ち帰り、キモチの中の「何か」につなげることができれば最高だ。

才能が集まる、発信される、

101

- 1 ●お正月広場
- 2 ●高松宮妃のおひなさま展
- 3 ●辻村寿三郎人形展
・タシヤニエューダーの世界展
・オーションカフェ③
- 5 ●スーパードッグフェスティバル2001
・トレインフェスタ2001



- 7 ●いわさぎちひろ展
- 8 ●ひびのこつえ「テロメラーゼ」展
・グランシップで夏遊び
・親と子のサイエンススクール
・オーションシアターサッカー放映
・ムービーシアター
- 9 ●生誕80周年「心の風景 山下清展」
・世界ハート展
- 10 ●地域伝統芸能
全国フェスティバル
- 11 ●西洋名画への招待
「モダーン」
・2001年
しずおか連詩の会
- 12 ●Sing2001



102

- 1 ●美しい静岡の魅力
第1回写真コンテスト入賞作品展
・お正月広場
- 2 ●高松宮妃のおひなさま展
- 3 ●わんぱく2002
- 4 ●日本画の美 第28回 創画展 静岡展
・写真展「ニューヨーク セブテンバー11」
- 5 ●スーパードッグフェスティバル'02
・トレインフェスタ2002
- 6 ●クリス・ステイルII
・パークス
写真展「FUJI」
・2002 FIFA
ワールドカップ™ 静岡開催
パブリックビューイング
in グランシップ
- 8 ●親子で学ぶ
サイエンススクール
・アジアワールド
・イン グランシップ



カルチャーショック大歓迎。そこから、何か“を見つけて。

Part 3
Art, Literature & etc.
アート・文芸
ほか

- 3/13(土)～4/4(日)
- 6階展示ギャラリー
- 月～金／AM10:00～PM5:00
(入場PM4:30まで)
- 土・日・祝日／AM10:00～PM6:00
(入場PM5:30まで)
- 一般900円(600円)

高校生以下400円(300円)()内は前売料金
初代ゴジラが誕生したのは、1954年。ビキニ環礁で被爆した第五福竜丸事件をきっかけに、放射能によって古代の恐竜が甦るというストーリーが生まれたという。本展では、歴代ゴジラ映画の中から、静岡県の焼津からゴジラが上陸、登場する映画『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』(通称『GMKゴジラ』)をピックアップして展示。映画で使用された造形物の展示や、メインキャラクターを造形した品田冬樹氏によるワークショップを開催。また、抽選で毎日20名に「ゴジラの時代」展オリジナルポスターのプレゼントも。

【出品作品・資料】

映画関連造形物／撮影用ゴジラ、撮影用対戦怪獣・ゴジラ撮影用造形物、特撮ステージ等

映画関連資料／ゴジラ映画ポスター・ゴジラ映画写真、シナリオ、パンフレット等

映像／1954ゴジラダイジェスト版、ゴジラ映画予告編等

写真／報道写真等

その他／第五福竜丸関連資料等

ワークショップ「ゴジラの怪獣をつくろう！」

- 3/13(土)・14(日)
- PM1:00～PM4:00
- 6階交流ホール

粘土を使ってゴジラや怪獣を造作。完成作品は本展で展示。

【講 師】品田冬樹(「ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃」怪獣造形担当)

【定 員】各回30名(親子参加可)

【参加料】2,000円(展覧会チケット1枚付)

「ゴジラの時代」展

撮影／二石トモキ ©2001,2003 TOHO PICTURES,INC TM&©2001,2003 TOHO CO.,LTD.

グランシップ・イヤーとなる2004年は、ゴジラ・イヤーでもある。グランシップは5周年、ゴジラはその誕生から50周年。そして、静岡県とゴジラは、知る人ぞ知る縁もいくつかあり、ゴジラ映画シリーズ第25作『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』では、焼津からゴジラが上陸するというシーンもあった。

さて、そんなゴジラが展示ギャラリーを占拠するかと思えば、夏には若きクリエイター注目の『Sing』がやってくる。今年は、コンペティションはもちろん、アーティストが競演するという、5周年ならではのエクストラ企画も楽しみなところだ。

- 10 ● 千年の時を超えて「源氏物語の世界」田辺聖子トークショー「源氏がたり」
- 辻村寿三郎人形展「源氏絵巻縁起」
- 有馬稲子「源氏物語」朗読
- ハイビジョン オペラシアター「スペードの女王」ドン・カルロス「よみがえる源氏物語絵巻」
- ハイビジョンシアター
- 2002年しずおか連詩の会
- Sing 2002
- クリスマススウィートメッセージ
- 1 ● 世界ハート展
- 2 ● 高松宮妃のおひなさま展
- 歴史探訪「2・26事件の謎を追う」
- ロバート・キャパ作品展
- 5 ● トレーンフェスタ2003
- 7 ● 「ウオレスとグルミント」のアドマンスタジオ展
- 8 ● 親子で学ぶサイエンススクール
- 11 ● 源氏物語「和に親しむ」林陽写真展
- 10 ● 宝井馬琴の家族でたのしむ講談教室
- 11 ● 源氏物語「和に親しむ」林陽写真展
- 香りの世界
- 雅楽講演会「雅楽の楽しみ」
- 「夢の浮橋」人形たちとの源氏物語」チケット発売記念トークショー

© and TM Aardman Animations Ltd.2003

ここ一点ではなく、周辺の開発も。

北見隆(アーティスト)

創刊以来、本誌扉を飾ってきた北見作品。
ついに04年新春グランシップ展示ギャラリーにて作品展を開催。

グランシップというものについて、開館のときから知っていたにもかかわらず、実際に見た外観は、想像とは違つて、建物自体が作品のようで驚きました。小さなギャラリーやデパートなどで作品を展示することが多い私にとつて、こうした美術館に近い空間は実は初めて。こういう空間でなければ、大きな作品はなかなか展示できませんから、いい機会を得たと思つてい

ます。それに高さを生かすために、急ぎょ脚立をそのままディスプレイに使つたりと、会場に来て、展示も創りあげていく楽しさもありました。期間中は、「G」で(作品を)見ましたと、直接ご挨拶してくださる読者の方も多かったですね。さらに今回、静岡在住の作家やデザイン関係の方、ギャラリーの方々と知り合うことができましたが、みなさんとても熱心で、静岡

から何かを発信しようというキモチを感じました。聞くところによりますと、グランシップは若手クリエイターのためのコンペなども盛んだそうで、今後ますます静岡の発信基地として位置づけられていくのではないかと思います。あとは周辺に商業施設が開発されてくるといいですね。周りに何も無いせいか、風が強く吹いていて、広場の芝生が寒そうでした。(笑)

求める!応援する!アートな発想。 Sing2004 & 特別企画展(仮称)

Sing2004

グランシップの施設、メディアを活用した自由な発想を支援する「Sing」では、今年も公募がスタート。今回は、〈空間プロデュース〉〈映像+音楽〉〈テレビ番組セット〉の3つのカテゴリーを用意して、企画案を募集している。

【公募締切】5/8(土)当日消印有効

【受賞企画発表&表彰式】8/6(金)

特別企画展(仮称)

■8/6(金)~

■グランシップ全館

■入場無料

グランシップの5年間で振り返るとともに、アーティストであり、毎回審査員を務める日比野克彦氏をはじめ、映像、写真、デザインなど各ジャンルのアーティストが「色」をテーマにグランシップ館内でさまざまな試みを展開。



多彩なリズムを集めた、夏の3日間。

文化のクロスロード

■8/20(金)~22(日)

■大ホール・海ほか

グランシップ夏祭り「文化のクロスロード」。今年のテーマは“リズム”。伝統のリズム、若いリズム、世界のリズムなど、さまざまなリズムを大ホールに展開。太鼓やヒップホップをはじめ、多彩なワークショップも開催。感じて楽しい、参加して楽しい3日間。

全5回を集大成。大岡信氏による講演も。

しずおか連詩の会 記念出版・講演会

■日時・場所未定

「しずおか連詩の会」は、大岡信氏を宗匠に毎秋開催。これまでに5つの連詩が完成し、このほどこれらを1冊にまとめ、出版することが決定した。これを記念し、昨秋文化勲章に輝いた大岡氏による講演会を開催する。



第17回地域文化活動賞表彰式・ 記念講演会

■3/13(土)

■PM1:00開場 PM1:30開演

■中ホール・大地

グランシップ開館5周年と財団設立20周年を記念して、表彰式と活動発表会の模様を一般に公開。また、山川静夫氏を招いての記念講演会や過去の受賞団体によるゲストステージも開催。ホワイエでは活動紹介展示コーナーも。

【講師】山川静夫

※受賞団体についてはP35を参照。

わたしのグランシップ5年。

第一期グランシップ・サポーター

鈴木 千恵子

開館以来、月2回、館内案内や新聞記事の切り抜きなど、サポーターとしてお手伝いさせていただいてきました。施設見学に来た小学生からお礼のお手紙をいただいたときはうれしく、しばらく飾っておいたことを覚えています。「連詩の会」や「能楽鑑賞教室」など、素晴らしい催しがたくさんあり、今後は一般の一人として、ここを訪れたいと思っています。



*以上は、自主企画事業のうち、「アート」文芸ほか関連の事業の実績

- 2003年
しずおか連詩の会
- 12 ●クリスマス
スウィートメッセージ
- 1 ●第2回静岡の魅力
フォトコンテスト
入賞作品展
- 北見隆展



千住真理子

運命のデュランティ。

「そこに何か運命的な出会いを感じるといつか、この楽器は何か意図があつて、二百年の眠りから覚め、きつと意味があつて、東の国の私のところまで来たのだらうと。ヴァイオリニストはたくさんいるのになぜ、私なのか。私に何ができるのかしらと、心から不安に感じましたね」

二百年の眠りから。

リハーサル中のその人を舞台袖から見た。よろしく願います、と快活な挨拶が聞こえたかと思うと、すぐさまヴァイオリンをすつと構えた。一呼吸の後、一瞬にしてあたりを支配した響き。それを忘れることは、おそらく一生ないだらうと思う。二百年前に生まれた名器「デュランティ」と、そこに生きているヴァイオリニストと。そこには血縁を感じさせるような、特別な空気があつた。そして、「楽器は人を選ぶ」という、この言葉は本当なのだと思う。

——二〇〇二年、ストラディヴァリウスのデュランティが千住さんの手に渡られたことは

とても話題になりました。その来歴や有名無名は別にして、ご本人のファースト・インプレッションは、いかがでしたか？

「弾いた途端にもう、めまいがしましたね。生まれてから一度も聴いたことのないような音が耳もとで鳴り響いて、本当にクラクラしました。科学的な言い方をすれば、おそらく振動の仕方が違うんじゃないかと思うんです。振動させる媒体を多く持っているんじゃないかと。一本の音を弾いていても、非常に多くの響きが聞こえる。物理的にも何かしらそういう状況になっているんじゃないかと思っていますね」

——ヴァイオリンは、その人の音になるまでに何年、何十年とかかるといわれていますが、三百年間、一度もプロの演奏家の手に渡らずにきたデュランティが、ご自身の音になるまでにどのくらいの時間がかかったのでしょうか。

「それが不思議なんです。むしろ通る、ヴァイオリンというのは、いい楽器の場合、満足のいく音になるまでに確かに三年から五年、十年とかかるものなんです。けれど、この楽器は初めて私が手にとった瞬間に鳴り響くんですね。というよりむしろ、私が弾かされてしまつような、非常に不思議な状況に引きずり込まれていく。これはいわゆるヴァイオリンじゃないんじゃないか。そういう恐ろしさがあるんです」——となると、「楽器は人を選ぶ」というのはやはり本当なんですね。

「選ばれたというふうには、とても思えないですけどね。でも、そこに何か運命

的な出会いを感じるといって、この楽器は何か意図があつて三百年の眠りから覚めて、きつと意味があつて、東の国の私のところまで来たのだらうと。ヴァオリニストは世界中にたくさんいるのに、なぜ、私ののだらうかと、そのときは心から不安に感じましたね。私に何ができるのかしらとね」

——そんなデュランティとのファースト・セッションとしてのアル・バムがどんなものになるだらうと、多くの方が興味をもたれていたのではないかと思います。バハの無伴奏だらうかいや、イザイかもしれないと。ところが完成した『カンタービレ』は、とても素敵な名曲集でした。

「まず、デュランティ自身が聴いてもらう人をすごく意識しているだらうと思うんです。誰に聴いてもらいたいか。それは少なくともクラシックの専門家だけではないだらうと。そうになると、私の好きなイザイなどをレコーディングしても、聴いていただけない方も出てくるかもしれない。一人でも多くの、今までクラシックを聴いたことのない人にも聴いてもらえるような曲となると、やはり『愛のあいさつ』や『アヴェ・マリア』、『ユーモレスク』という、世界中で愛されてきたヴァイオリンの名曲なんですね。デュランティが三百年の眠りから覚めたということ、人を選ぶことなく、たとえば、農作業をしているおばあさんにも聴いてほしいのだと。そういうメッセージとして私は受けとめたんです」

——『ユーモレスク』といえば、お祖父さまとお祖母さまは、かのアインシュタインが弾く

『ユーモレスク』をお聴きになったことがあるそうですね。

「そうなんですよ。母方の祖父が物理学者でして、当時、珍しいことに船で留学をしたんです。その船の中にアインシュタインがいて、日が暮れてくると、甲板に出て、ヴァイオリンを弾いてくれたと。それがとてもよかったらしいですね。『こんな風に弾くのよ』と、今から思えば不格好なんですよ。けれど、ヴァイオリンを弾くまねをして



デュランティは、ストラディヴァリの黄金期中の黄金期の作で、ローマ法王の秘書官の注文により製作された最高傑作の一つといわれる。その後、フランス貴族デュランティ家の手に渡ったことが号名の由来。さらにスイスの大富豪に渡り、今日までコレクションとして眠っていたが、それはついに見つめ、2002年夏、氏と運命的な出会いを果たした。

くれた祖母の姿が今でも目に焼きついていきます。そんなこともあって、祖父母は、私たち兄妹三人にヴァイオリンをやらせたかったらしいんですね」

心が丸裸にされる怖さ。

——二歳三月月から始められたヴァイオリンですが、一時はヴァイオリンから離れたこともあったとかがついています。それでもなお再びその道に戻られたという、そのヴァイオリンの魅力とは何ですか。

「とても原始的なことですが、ヴァイオリンに張ってある四本の弦をバンと弾いたときに、単に一つの音が響くわけじゃないんですね。そのとき私は二年ほどヴァイオリンを触ってなくて、それで二年ぶりに楽器ケースを開けて、一つの弦を弾いてみた。するとそれは自分が考えていた以上に多彩な響きだつたんですね。それに私はすごく感動して、自然に涙が流れたんです。ヴァイオリンとは、なんて素晴らしい楽器だらう

と。その記憶と、さらに今回デュランティが見せてくれた、びくりするような響きの展開とが、私の中に刻まれて、ヴァイオリンというのは、特殊な生物のような気がする程にすごいものだと思つたんです」

——小さな頃から呼ばれ続けた「天才」という言葉に悩まれた時期もありだつたそうですね。

「音楽に限らず、天才少女とか、天才少年という言葉をよく耳にしますよね。それは大人からすれば、むしろ讚美であり、何も悪いことをしているようには思えないけ

デュランティを手にする以前と以後とは、演奏そのものも変えたという。「楽器の構え方から、弓の持ち方、演奏の方法、力の入れ方など、すべてを変えました。全部リセットして。ヴァイオリンを始めた2歳3か月の自分に戻ってやることばかりでした」



【せんじゅまりこ】

ヴァイオリニスト。2歳3か月より鷺見三郎に師事。全日本学生音楽コンクール小学生の部全国1位。75年N響と共演し12歳でプロデビュー。日本音楽コンクールに最年少15歳で優勝、レウカディア賞受賞。パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。慶應義塾大学卒業後、87年ロンドン、88年ローマデビュー。CDで数々のヒット賞受賞の傍ら、文化大使派遣演奏会としてブラジル、チリ等で演奏会開催。社会活動にも関心を寄せるほか、ステージ音響の研究や執筆活動でも活躍。86～88年NHK大型報道番組のキャスターを務める。文化庁「芸術作品賞」、村松賞、モービル音楽奨励賞等受賞。99年NYカーネギーホールのウェイル・リサイタルホールにてソロリサイタルを開き、大成功を収める。01年NHK朝の連続テレビ小説「ほんまもん」の音楽を兄の千住明が担当、真理子が演奏し話題に。02年幻の名器ストラディヴァリウスのデュランティと運命的な出会いを果たす。今年は全国でスーク室内オーケストラと再演の予定。

れど、子どもというのは、案外そのまま正直に、ともすれば深刻に受けとめてしまうものだということを私は自身の体験からいいたいですね。「天才」と呼ばれることを本人が重荷に感じ、それらしく生きていかなければいけないというプレッシャーに潰されていく。そういうことがあるんですよ。ヴァイオリンやピアノを弾く子どもたちの中にも、天才と呼ばれながら、ある時期から名前が消えてしまう人たちが今現在もいると思いますけれど、それはただ単にその子が怠けてダメになっただけではなくて、やはり本人にしか感じ得ないプレッシャーや縛られ方から逃げ出さずにはいられなくなる、ということがあるということなんです」

——ステージ活動の一方で、度々ホスレスなども訪問されているそうですが。

「ホスレスや老人ホームなどに行くと、癒されるのは自分なんですよね。あるいは大切なことを思い出させるというか、ある意味で原点に戻る。私は無宗教なのでよくわからないんですが、宗教を持たれている方が教会に一步足を踏み入れたときに感じるようなことなのかなと思うたり。そういう純粋な空気が、ボランティアの場所にはありますね」

——何かにお書きになっていたと思うのですが、ご自身にとって「ヴァイオリンを弾く」ということは、仕事ではなくて、心の現れである」と。

「それこそ私がヴァイオリンを一時やめる直前にすごく思ったことがあるんです。それは、ステージに出ると、心が丸裸にされ

るんだなと。顔や表情は繕える。悲しいときに嬉しい顔はできる。怒っていても何でもない顔もできる。でも、ステージに出ると心は繕えない。こまかせないんですね。それが演奏の怖さ。自分のすべてをさらけだす以前に、「出てしまふもの」なんです。じゃあ、どうしたらいいかというと、自分の内面を見ざるを得ない。人に共感してもらえないような自分の内面に磨いていかなければいけない。そうでなければ音楽をやる意味も資格もない。そんなことを感じたことがありました。そして、それは今もその通りだと思っています」

——今年の六月、そんな千住さんによるデュランティの演奏が聴けるとあって、今からとても楽しみです。

「コンサートの最後には、シューベルトの名曲『奏を弾くことになっています。そして、メンバーですが、実は私が一番苦しんでいた二十歳のとき、一緒に室内楽をやるう、四人でカルテットをやるうと、この世界に再び引つ張り出してくれた方が、N響の菅沼（準二）さんや永峰（高志）さんであり、チエロの徳永（兼一郎）さんだったんですね。私が一番苦しい時期になんとか音楽を手放さないような方向に持ってきてくださった方々で、徳永さんは、残念ながら亡くなられたけれども、あとの方を含め、その当時からメンバーに加わってくださった西田（直文）さんと今回一緒にするわけです。言うてみれば、室内楽では、この方々以外には考えられない。まさに「私のメンバー」という感じですね」



チケット発売中

6/4 金

千住真理子と仲間たち

PM6:30開場 PM7:00開演

グランシップ 中ホール・大地

全席指定(税込)/S席 4,000円 A席 3,000円

学生席1,500円 当日各500円増